

# 幕末ロシア語研究の新出資料について-国学者平田篤胤のロシア語資料-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学人文科学研究所 公開日: 2010-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岩井, 憲幸 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/7045">http://hdl.handle.net/10291/7045</a>

幕末ロシア語研究の新出資料について  
—国学者平田篤胤のロシア語資料—

岩 井 憲 幸

## An Inquiry into New Materials for Early Russian Studies in Japan

IWAI Noriyuki

Recently new materials for early Russian studies in the Yedo era have been discovered in Tokyo. They originally belonged to Atsutane Hirata (1776-1843), a famous Japanese classical scholar and Shintōist, and they are as follows:

- 1) *Chishimano shiranami*
- 2) *Roshiya kōtei keizu*
- 3) *Sekii den ryaku*
- 4) *Sekijin mondō*
- 5) *Roshiya shūsetsu*
- 6) *Roshiyago*
- 7) *Oroshiya moji*
- 8) *Roshiya moji renshūchō*
- 9) *Yezo shotō ichiran ryakuzu*
- 10) *Etorofutō zu*
- 11) *Nagasaki zu*
- 12) *Chishimano shiranami fuzu*
- 13) *Yezo chizu*
- 14) *Roshiya moji A*
- 15) *Roshiya moji B*
- 16) *Okuyaku setsui*
- 17) *Roshiya moji C*

Numbers 6-8 and 14-17 are materials used for the study of the Russian language. They contain the Russian alphabet, many different forms for writing characters, a variety of Russian syllables, and texts of Khvostov's diplomatic notes with trial Japanese translations of them. Number 6 is a Russian-Japanese vocabulary in *katakana* characters. It contains roughly 1800 Russian words and was compiled by Atsutane for his own use. It is an original work. Atsutane wanted to gain a knowledge of Russian and tried hard, but, in my opinion, he failed.

In 1804 a Russian envoy, Rezanov, came to Nagasaki in an attempt to cultivate trade with

Japan. He had a document that Japanese authorities had presented to Laxman at Hakodate in 1792, one which granted Russians permission to conduct negotiations about trade at Nagasaki, the only port in Japan open to foreign vessels in the Yedo era. When Rezanov's claim was refused by the Japanese government, he lost his temper and ordered two of his men, Captain Khvostov and Davidov, to threaten Japan in reprisal for the refusal. In 1806 Khvostov and Davidov attacked Ainu villages in Saghalien, left documents in Russian declaring their possession of the villages, and captured Japanese land wardens. The next year Khvostov released them with a letter addressed to the Hakodate *bugyō* to the actions he had taken.

These events felt threatening to the Japanese government, and while at the same time they excited an interest in Russia and Russians among many Japanese intellectuals. This was true as well for Atsutane, and he wanted to acquire a basis for professional studies. Russian words in *katakana* characters were of no use in trying to understand Russian texts, however, because he and other Japanese lacked a knowledge of the grammar and syntax of the Russian language. The newly discovered materials give an indication of this state of Russian studies in the Yedo era.

**〈個人研究第2種〉****幕末ロシア語研究の新出資料について****—国学者平田篤胤のロシア語資料—****岩井 憲 幸****はじめに**

国学者の平田篤胤は、蘭学にも興味を示したとされる。<sup>(注1)</sup>ところが今回、篤胤自らがロシア語を学んだと考えられる資料の出現をみたのである。東京代々木の平田神社には篤胤・鏡胤・延胤三代の資料が伝来するが、その篤胤のものの中にこれを証する諸資料が確認された。これらは、従来まったく知られておらず、よってなによりもまず、わが国幕末ロシア語研究の新出資料と評すべきである。

本稿は、日本におけるロシア語学習・研究史からの観点に立ち、かかる篤胤資料の性格および他所の資料との関連、ついで学習・研究史上での位置等につき、記述と考察を行なうものである。

**1 篤胤のロシア語研究**

篤胤もまた文化年間の諸事件に触発されて、北辺への関心を抱いたようである。その問題意識は1813(文政10)年に『千島白波』として結実したと考えられる。しかしながら、その編述の前に篤胤はロシアにかかわるさまざまな研究を行なっているのである。

今回、国立歴史民族博物館の調査・整理の後、特別に展示された史料のうち、上記研究の跡を示すところのロシアにかかわるものを列挙すれば次の通りである。(名称等は歴史民族博物館による提示に従う。)

- 1) 稿本「千島白波」三冊
- 2) 「ロシア皇帝系図」一点
- 3) 「赤夷伝略」五枚
- 4) 「赤人問答」一冊
- 5) 「魯西亜集説」一冊
- 6) 「魯西亜語」上下二冊

## 幕末ロシア語研究の新出資料について

- 7) 「於呂舎文字」一冊
- 8) 「ロシア文字練習帳」一冊
- 9) 蝦夷諸島一覽略図
- 10) エトロフ島図
- 11) 長崎図
- 12) 「千島白波附図五帳稿」
- 13) 蝦夷地図
- 14) 「ロシア文字」一冊
- 15) 「ロシア文字」一冊
- 16) 「臆訳切意」
- 17) 「ロシア文字」一冊

各資料の紹介は、展示目録および研究報告の該所に譲るが、<sup>(註2)</sup> いずれにせよ篤胤の用意周到さは見てとれるであろう。

このうち本稿では語学資料と目される6・7・8・14・15・16・17を対象とする。

## 2 篤胤のロシア語学書

上記7つの資料をあらためて列挙する。ただし内題と目されるものをタイトルとし、目録番号(かっこ内に示す)順にかかげる。対照のために[ ]内に前節での通し番号を示しておく。③は標題を欠くために仮名で示す。

- ① 淤呂舎字用例考他(冊子77) [14]
- ② 淤呂舎文字 (ノ 78) [7]
- ③ [ロシア文字] (ノ 80) [8]
- ④ 銅板正字他 (ノ 81) [15]
- ⑤ 臆訳切意1 (ノ 82) [16]
- ⑥ 臆訳切意2他 (ノ 83) [17]
- ⑦ 魯西亞語上・下 (和装A-75-1・2) [6]

①②の特に「淤」字に注意されたい。「オ [ヲ] ロシヤ」を表記する文字としては、「於」とともに例が少ない用字法である。「オ [ヲ] ランダ」の第一字を「泥」で表記するものと同じ類か。「淤呂舎」と表記するのは篤胤自身によるであろう。

7資料中もっとも重要なものが⑦であり、本稿でも後にやや詳しくとり上げるが、以下まず①～⑥まで順をおって資料の書誌的記述と内容の検討に移る。

### ① 淤呂舎字用例考他

大きさ縦24.5cm、横17.5cm前後。全13枚。こよりによる表紙なしの仮綴じ。下記のイ)とハ)は

元来横帳綴じであったものをひらいて他と合綴したもの。筆は墨と朱の2種。内容は次の通り。「」内は原文の引用。

- イ) 1オ～1ウ「淤呂舎字用例考」
- ロ) 2ウ～3オ 音綴表（未完成）
- ハ) 4オ～5ウ「淤呂舎字格」
- ニ) 6オ～6ウ 銅札写し
- ホ) 7オ～7ウ「銅札譯 光太夫」二枚共同文言之由」
- ヘ) 8オ～8ウ フヴォストフ声明文片仮名書と訳
- ト) 9オ～9ウ「口上」
- チ) 10オ～13ウ 悉曇文字表等

イ) は上段にのみロシア文字活字体大文字を示し、文字名を各字上に仮名書きする。仮名の上に母音の場合は朱丸、子音の場合は朱の小横棒を付す。特別な音（Ъ, Ы, Ъ, І）には下に朱の△を付す。末に<三十三字>と記す。1ウ下段に<繪圖／○字源／○一二三／○文字諸牒／○文字配音例／○配音>とある。ロ) は3オ・2ウの左側たてにБ～Тまでの子音字母を、3オ上方よこにА, Е, И, О, У, Ъ, Ю, Я, ІОと母音文字を書くが、3オは空欄。2ウは片仮名で例えばЛの場合<ラ, レ, リ, ロ, ル, ラー, レー, リー, ロー, ルー, ラユ, レユ, リユ, ロユ, ルユ, ラヤ, レヤ, リヤ, ロヤ, ルヤ>のごとく音綴表を示す。<ラー>以下は朱筆。ハ) はまずロシア文字大文字活字体・同筆記体・小文字筆記体を示す。ついで例えばКの場合下に<カ 本音>, 左に<韻字を配してカキケコ>と注する。イ) とハ) は元来一体で、横帳綴じにされていたとみられる。ニ) ～ト) はいわゆるフヴォストフ文書に関するものである。ニ) は1806年10月11日〔あるいは新暦〕23日付の銅板の写し。ロシア語大文字テキストの写しで、文字上に朱の片仮名で読みを付す。四隅の鋳跡まで写している。良写本。（ロシア語テキストの翻刻は第4節を見よ。）

ホ) はニ) のロシア語を片仮名書きに横書きにし、その下に各単語の日本語を付したものの。横書きがめずらしい。（翻刻は第4節を見よ。）首に<二枚共同文言之由>とあるが、銅板はもう1枚存在した（後述）。ヘ) はいわゆるフヴォストフの紙札3枚のうちのひとつを、ロシア語は片仮名で縦書きに示したのち、その左右に訳と注を付したもの。ロシア文字テキストは欠（後述）。

ト) はフヴォストフ文書のうち1807年の松前奉行あて書簡（ロシア側による片仮名文）の写しである。上欄に<コレハ真面目ノウツシナリ>とある。翻刻は他書に譲るが、<sup>(注3)</sup>和文は北奥方言をうかがわせる。片仮名書きの右傍に朱で漢字をあてるが、これは原本には存在しなかったもので、後日の付加である。末に<月日 ヲロシア／マツマエランブギヨサマ>とある。チ) については省略に従う。

## ② 淤呂舎文字

大きさ縦24cm, 横17cm 前後。綴じ糸による綴じ。表紙を含め19枚。表題は表紙に打付け書きで<淤呂舎文字>とあり、その右傍に<オロシスコイアヅブキ>, 表題下に<幸太夫」所傳>とある。

## 幕末ロシア語研究の新出資料について

さらに本文末、後の裏表紙ウに次のような奥書を有する。

文化三丙寅年夏四月初七日写畢

松原如水易直子諒

右光太夫所傳赤夷國字一卷轉借松原氏所藏之」本而写之畢干時文化五戊辰年六月十八日

平田篤胤

これにより本写本の由来が判明する。ただし松原右仲の本がすでに編集を加えられたものとなっていることを本写本は示している。内容は以下の通り。

- イ) 本文 1 オ                   ロシア文字活字体大文字
- ロ) ㄥ 1 ウ               同筆記体大文字・小文字
- ハ) ㄥ 2 オ               アラビア数字
- ニ) ㄥ 2 ウ～3 ウ       ロシア国官名
- ホ) ㄥ 4 オ～9 オ       ロシア文字筆記体大・小文字とロシア文字によるイロハ
- へ) ㄥ 10 オ             アラビア数字とラテン数字
- ト) ㄥ 10 ウ～11 オ     ロシア文字字体表
- チ) ㄥ 11 ウ～15 ウ    同音綴表
- リ) 16 オ                 レザノフ所伝ロシア文字表
- ヌ) 17 オ～18 オ        光太夫扇面の書写し

イ) は活字体大文字に片仮名で名称を示す。横書 5 行。ロ) は筆記体大・小を示し、上に名称、さらに母音字に朱丸、子音字に朱の漢数字を付す。横書 7 行。3 がぬけている。ハ) はアラビア数字のみ 1～20 を横 3 行に、第 4 行に 30, 40, 50, 60, 70 を書く。ニ) ははじめロシア文字筆記体で官名を綴り、下に片仮名での読みを付し、上に給銀を注する。横 7 行で、3 ウが首、2 ウは尾。末 (2 ウ) に、次のようにある。

ісепо イセノ	Кунп クニ	шплоко シロコ
Даікокіа ダイコクヤ	Коодаю コヲダユ	фуде フデ

п は и の誤りだが、ここではもとのロシア文字の書き手が光太夫であったことを示す点で重要といえよう。ホ) は前半が 9 オから始まり、7 オに終る。後半は 4 オが首、6 オが尾。両者のタイトルを示す部分は 9 オに次のようにある。ここでも и および н が п に誤って綴られる。

Росіп ヲロシ井	Сукои. スコイ	Ажубукп. アズブキ
Ніппопь ニツボン		
ирохасг(sic)о イロハノ	коть. コト	

下の片仮名でじゅうぶん意がとれよう。前半ではロシア文字筆記体大・小を示し、その下に名称を、さらに子音文字の場合は、例えば Б では < Біо, біо / ビヤウ > のように < io > との合綴を示す。



後半はまず片仮名でイロハを示し、この下にロシア文字によってこれを表記する。あわせて字体の変異も示す。9ウには横中央2行にわたり< Россіискія / Чмо >と不完全なロシア語タイトルが書かれている。これが、9オ以前のすなわちホ)のタイトルともうけとれるが、10オ以下すなわちへ)ト)チ)のタイトルともとりうる。粉本との関係から後者の可能性が強いとみておく。へ)は上横2行にアラビア数字とその上方に漢数字をそえ、下横2行にラテン数字とその上方に漢数字をそえる。ト)は縦に筆記体大・小のロシア文字を配したもの。文字名は片仮名書き。チ)はロ)で示された子音字の漢数字順に音綴一覧を片仮名を付して示す。縦6行。子音文字の別を片かっこで示し、その脇に朱で上記漢数字を付している。リ)は、横6行にロシア文字を示し、ここでも上方に○と漢数字をそれぞれ母音字・子音字の印として示す。ただし表の左に次のよう記事を有する。

此三十一字者松原氏曰文化元甲子年所來朝之」使節レサノツト所傳他ト云

筆記体であるが、文字の形がやや光太夫のものとは異なっているようである。ヌ)は2首が認められる。17オには次のようにある。

Ніхонмева. іоіцимо.

комар. оогікань.

Даі Коо.

このロシア文字に縦書きで<ニホンメワ ヨイチモ」コマル オーギカナ」大幸>と片仮名・漢字で読みをあて、さらにロシア文字3行目下に縦3行にて<二本めは与市も」こまる」あふぎかな>と添える。17ウにはロシア文字が次のようにある。

Тацивакаре. інабано. яmano

Минени. оору. мацу. тоши.

Кикаба. имакаерікому.

даи коо

これらには<タチワカレ. イナバノ ヤマノ」ミ子ニ オール マツ トシ」キカバ イマカエリコム>と読みを片仮名縦書きで付す。<大光>の読みは付されない。ただし次に、<右ノ歌ト発句ハ幸太夫人ノ扇面ニ書シタルヲ写ス>と注する<sup>(註4)</sup>。これらの2首は、文字も大きいせいも、光太夫の書風をよく写しており、さらにピリオドを必ず打つ光太夫の書きぐせも明瞭に写していて、興味深い。Bの小文字にпを使うことにも注意せよ。光太夫は、帰朝後多くのロシア文字による書跡を扇面に残したことはよく知られている。

### ③ [ロシア文字]

表紙がなく、第1枚目ががのどもとの一部を残して破損している。これを除けば全9枚。ただし下記の下付けでいえば5および7は半葉しか存在しない。すなわち5は5ウ、7は7ウのみである。大きさ縦24.3cm、横17cm前後。こよりによる仮綴じ。内容は次の通り。ただし第1枚目は文字が残存するので、これから1オ・1ウと算える。

イ) 1オ～2オ 筆記体大文字花文字 a

## 幕末ロシア語研究の新出資料について

- ロ) 2ウ～3オ                    "            b
- ハ) 3ウ～4オ    筆記体大文字・小文字 a
- ニ) 5ウ           活字体大文字
- ホ) 6オ           筆記体大文字
- へ) 6ウ           筆記体小文字
- ト) 7オ           ローマ数字
- チ) 8オ           数詞片仮名書きロシア語
- リ) 9オ～11ウ   音綴表

以上細かく記したが、おそらく全体は3つの部分に分かれる。すなわち、イ)～ハ)、ニ)～チ)、リ)の3つであり、これは粉本に由来する(後述)。イ)ロ)ハ)はすべて見開き状態でひとまとまり。4行どり。1オ～2ウは文字上に片仮名の読みを付す。ハ)大文字の上に小文字を配する。ニ)は活字体大文字の上に片仮名の読みを付す。6行どり。ホ)へ)は文字のみで4行どり。ト)は4行どりで、上2行は筆記体、下2行は活字体で下に角ばったアラビア数字を配する。チ)は縦書きで<一オチン>のように2段11行で<百千万 ミリヨン>まで示す。リ)は10オ、11ウ左端に子音大文字、10オ上端に母音大文字および<P + 母音>の文字を配し、これらの交差上に音綴を多くは朱筆で示す。ただし子音字はTまで。Φ以下を欠。例えばBの場合、<バ ベ ビ ボ ブ ベー ビユ ビヤ ビヨ バラ ベラ ビラ ボラ ブラ …>のごとくである。①淤呂舎字用例考他、ロ)音綴表の完成形とみられる。

## ④ 銅板正字他

これは同一の整理番号が付されているが、1枚+仮綴じされた4枚からなる。大きさ縦25cm、横17.5cm前後。便宜上全5枚とみると、次のような内容である。

- イ) 1オ           銅板正字
- ロ) 2オ～5ウ    名村多吉郎訳文

イ)は1オに次のようにある。

○文化丙寅年九月淤呂舎人唐太嶋=置銅板正字」形状寸法之風説大+豎九寸程横壹尺斗リ」厚+五六分の木版に打付銅版の正中=穴一」あり式枚の内一枚ハ横に裂理あり其文字の彫」刻甚拙なりと云ふ

よって、これは①淤呂舎字用例考他のニ)銅板写しに付されるべきものである。ロ)はまず第1に注目すべきは、2オの上方にロシア文字筆記体で、

ХиМиТуНоФуМи

と横に朱書きし、その上方に<ヒミツノフミ>と小さく墨書する。さらに、下方のど近くにたてに<АТУ>と筆記体で朱書きにし、その右傍に<アツ>と読みを墨書する。<篤>であろう。ともに篤胤の筆跡と思われる。悪筆だがロシア文字による日本語表記として、自身による勉強の成果は認めてよい。2ウには下方逆むきに<Ба бе би>と筆記体による文字があり、これも篤胤の手であろう。

ついで3オ首には次のようにある。

○淤呂舎人惠登呂布嶋へ傳致せし紙札譯文

5オには文末に

卯八月 通詞 名村多吉郎

とあり、その間の文を読めば、上述した1807年松前奉行あてフヴォストフ書簡のフランス語文を読み解かんとしたものであることが知れる。よって内容上①淤呂舎字用例考他のト)に連なるものである。

### ⑤ 臆譯切意 1

大きさ縦27cm, 横54cm 前後。1枚。料紙は横長についだもの。全体の右3分の2ほどに横書き5行に片仮名でフヴォストフ紙札テキストを掲げる。その下に和訳を付す。ついで残余3分の1部分に<臆譯切意>と題する訳文を記す。(これらは第4節において翻刻する)。<臆譯切意>は<訳を推量し、意味だけをうまくとる>の意であろうか。

### ⑥ 臆譯切意 2 他

大きさ縦24.8cm, 横17.5cm 前後。墨付3枚。内容は次の通りである。

イ) 1オ～2オ 音綴表

ロ) 2ウ～3オ 銅板の片仮名によるテキスト写し

ハ) 3オ～3ウ 臆譯切意

イ) は③ [ロシア文字] のり) 音綴表と同種。ただし横の列は< АЕИОУЪЮЯІŎ >までだが、縦の列は Б から Ц まで。しかも内容上、1ウ、2オ、1オの順で並べるべきである。2ウ～3オは2種のテキストを写すが、2ウ前半2行はフヴォストフ紙札の後半を写し、その末に次のようにある。

三枚共ニ同文言之由」墨 加藤肩吾」朱 茂禎

ついで3オまで4行は、銅板テキストの写しであり、その末に次のようにある。

銅札譯」二枚共同文言之由」光太夫

この注は①淤呂舎字用例考他の7オの注とほぼ同文と認めてよい。銅板テキスト写しも同7オ～7ウのテキストと同じである。さて、3オ～ウには次にこうある。

臆譯切意

千八百六年文化三年ニ當ル九月此方ノ九月也十二廿四日此方ノ日ニアラス魯西亜國ノ」命ヲ受テ「サワリリンヤ」唐太島欵ノ諸島ヲ貰ヒ受ント欲ス——」女帝「エカテリヲナ」——當今「アレキサンデラ」——「ダビー」官名ニ命ノ此ニ来ラシム——抑モ我大魯西亜國崇奉」ノ宗旨ハ至テ尊キ一箇ノ宗門ナリ他邦ニテ怪ミ惡ム」無ク信義ヲ結ヒ交易ヲ許シ給フ」ヲ希フ

この一文は⑤臆譯切意1の末の一文と、小異はあるが、同じと断じてよい。とすれば、⑤のテキスト下の訳(墨)と朱の注は2ウの<墨加藤肩吾」朱 茂禎>に従えば、この2人によることになりそうである。しかし一方、ロ) ハ) は内容からは、①淤呂舎字用例考他の二) ホ) ヘ) の部分に属すべ

きものである。

### 3 資料①～⑥の問題点

前節では資料①～⑥につき、主に書誌と内容を列挙したが、あらためてこれら資料をひとまとまりとして見た場合に、次の諸点が浮上する。

- i) 資料に錯簡と混綴が存在する。
- ii) 年紀が明確なものは②淤呂舎文字のみ。文化5年(1809)6月18日写本。
- iii) 内容は(a)ロシア文字と音綴さらに数字に関するもの、(b)フヴォストフ文書のテキストと訳に関するもの、の2つに分けられる。
- iv) 資料中に現れる日本人の人名は篤胤を除けば、光太夫/幸太夫/大幸、松原如水、名村多吉郎、加藤肩吾、[大概]茂禎、左平の6人。
- v) 原資料が想定される。

いうまでもなく、i)とiii)は関連するし、さらにiii)iv)v)は密接に関わる。

i)については、上記資料中⑤を除き他は大きさはほぼ同じサイズ(24×17cm程度)、すなわち半紙本の大きさであることに注意されたい。①は冒頭にもとは横帳綴じであったものが開かれて綴じこまれていることは上述したが、それはともかく、これらは今日別冊となっているものの、元来は多くはばらばらで、後に仮に、ときには帰属を誤って綴じられたものではないかとみられるのである。この点は始めに念頭におくべきである。

ii)については他資料の成立時にかかわる重要な証拠の一つとなるが、時系列上おさえておくべきは次の点であろう。まず文化5年だが、この時篤胤は33歳、江戸京橋にあった。

寛政4年(1792)	遣日修交使節ラクスマン来り、漂流民光太夫ら帰朝
〃 6年(1794)	『北槎聞略』成る
文化1年(1804)	ロシア特使レザノフ来り、漂流民津太夫ら帰朝
〃 3年(1806)	レザノフの部下フヴォストフ、カラフトを襲撃
〃 4年(1807)	『環海異聞』成る
文政10年(1813)	『千島白波』成る

iii)(a)については、ロシア文字そのものの形すなわち大文字と小文字、活字体と筆記体、名称から開始され、つぎに初原的な綴り、さらにロシア文字を用いて日本語をどう綴るかに及ぶ。これには後述の如く、原資料が存在する。(b)のフヴォストフ文書だが、広義のフヴォストフ文書は大別して1806年のものと1807年のものとの2種がある。前者はフヴォストフらが1806年10月10日カラフトのクシュンコタンに、翌10月11日オフイトマリに上陸し、残置した銅板2枚と紙札3枚が属する。後者は1807年5月に、2度目に掠奪を行なった時点で捕虜とした南部藩士大村治五平ほか7名を釈放する際に、松前奉行あてに託した書簡2通3点が属する。書簡はロシア語文のものフランス語文のものとの2通であるが、前者ロシア語文のもの裏には日本語片仮名による訳文が書かれてあ

た。カラフト番人源七による裏書きである。

iv) についても一言する。大黒屋光太夫は公的には<幸>字を用いて<幸太夫>と書くことが多いが、自分自身では<光太夫>と<光>字を使うことが多い。ロシア文字での署名は筆記体で<Dai Koo>と綴ることが多い。いうまでもなく伊勢の漂流民で、ロシアに10年滞留し寛政4年(1792)ラクスマンにともなわれて帰国した。松原如水は銅版画家の松原右伸であり、のちに露文・和文を混じえて「萬國輿地全圖」を刊行する人物である。名村多吉郎は蘭通詞であり、レザノフ来航時にその任にあった。加藤肩吾は松前蕃医師であり、寛政4年ネモロにおいていちやくラクスマンらに会い、直後に『魯西亜実記』を著わした。ロシア語を学習・研究したわが国初期の人物の一人であり、その力をかわれて一時江戸の昌平黌にあった。大槻茂禎は大槻玄沢の子の玄幹である。仙台藩医にしでのちの天文台訳員となった。左平は仙台漂民の一人。

#### 4 ①～⑥の原資料

上記資料中、直接の写本の由来を明記するものは②淤呂舎文字のみである。ただしその中身を検討する時、この原写本も元来複数の原資料から構成されていることに気づく。

しかしながら、①～⑥の資料全体を虚心坦懐に見て、原ロシア語資料に直結すると考えられるものは次のものである。(下記3はこれに準ずる)。

1. 銅札の写し (①淤呂舎用例考他 6オ・ウ)
2. 花文字等 (③ [ロシア文字] 1オ～4オ)
3. 口上 (① 9オ・ウ)

また、光太夫筆の原資料に直結すると予想されるものは次のようである。

4. ロシア国官名 (②淤呂舎文字 2ウ～3ウ)
5. 扇面の書写し (② 17オ～18オ)
6. 銅札譯 (① 7オ・ウ；⑥臆譯切意2他 2ウ・3オ)

さらに、光太夫以外の人物の原資料に直結するものとみられるものは次の通りである。

7. フヴォストフ声明文片仮名書と訳 (① 8オ・ウ, ⑥ 2ウ；⑤臆譯切意1)
8. 名村多吉郎訳文 (④銅板正字他 3オ～5オ)
9. レザノフ所伝文字表

フヴォストフ文書にかかわる資料は、1・3・6・7・8である。<sup>(註5)</sup> 同文書1806年のもの2種のうち銅板2枚の一方の写しが1である。そのテキスト全5行を翻字すれば次の通り。(朱筆片仮名は省略)

1806 ГОДА ОКПЯБРЯ /  $\frac{11}{23}$  ДНЯ РОССИИСКІИ ФРЕ / ГАПЪ ЮНОНА БЫЛЬ / ЗДЕСЬ  
СЕЛЕНИЕ НАЗВА / НО ЛЮБОПЫПСПВО

[1806年10月11日 [あるいは新暦] 23日、ロシアのフレガート艦ユノナはここに来たり。一村落は「好奇」と名づけられたり。]

## 幕末ロシア語研究の新出資料について

上記テキストの片仮名表記による訳稿が6である。「淤呂舎字用例考他」の7ウ・オには次のようにある。(原文は珍しく横書き5段。片仮名テキスト下の訳語は朱筆。縦書きも混在するが、今横書きとした。)は改行を示す。)

銅札譯 光太夫」二枚共同文言之由

1            8            0            6  
チイセツ、 ヲ、セミ|リ、ソイウト、 セストイ・  
千            八            百            六

ゴータ・ ヲキチヤブリヤ」チ<sup>23</sup>。テイ  
年            九月            廿

ワツチ、 テリトイデニヤ、 ヲロンー  
三            日

スコイ プレ」タアキ、 エノナ、 ビ

リ」 ァデース、 セレニエ、 ナシワ・」  
此ニ  
此ニ左平

ノ、 リユボニ、 チスウナ  
愛スルヲライフ

同様の訳稿が「臆譯切意2他」2ウ・3オに次のようにある。(原文縦書き、今横書きとする。)

チイセツオ、セム ソウト セストイ  
1    8    0    6    コータ    オキチヤブリヤ  
千    八    百    六    年            九月

デワツチ  
23」テリトイデニヤー ヲロシイスコイ  
廿三            日

ブレ タアチ」ユノナ ビリ ァデース  
此ニ 左平

セレニエ ナジワノ」 リユボニ チスウラー」  
愛スルヲ

銅札譯」二枚共同文言之由」光太夫

銅板2枚の他方はこの篤胤の資料中に存しない。他所での伝来のひとつ、鷹見泉石による写しによれば以下の如きであった。<sup>(注6)</sup> 筆写の誤りは正して引用する。

1806 ГОДА ОКПЯБРЯ 10 ДНЯ /

РОССИИСКІИ ФРЕГАТЪ ЮНОНА /

БЫЛЪ ЗДѢСЬ И НАЗВАЛЪ /

СЪЛЕНІЕ СУМНѢНІЕМ

[1806年10月10日、ロシアのフレガート艦ユノナはここに来りて、一村を「疑い」と名づけたり。]

銅板2枚の写し、あるいは訳稿は、上記引用のごとく「二枚共同文言之由」等とあることから、本来

揃っていたものと考えられる。

1806年フヴォストフ文書のもう一方、すなわち紙札3枚については、ロシア文字による写しがここに存しない。7が片仮名書きとその訳稿である。ロシア文字による紙札3枚の写しは他所に複数存するが、今鷹見泉石による写しを引用すれば次の通りである。(誤写は正す)。

1806 Года октября  $\frac{11}{23}$  дня Россійскій  
 ф/регатъ Юнона [, ] подъ начальствомъ/флота  
 Лейтенанта Хвостова [, ] въ знак/ъ принятія  
 острова Сахалина и жи/телей онаго подъ  
 всѣмилоствѣй/шее покровительство Россійскаго  
 импе/[рат]ра Александра Перваго [, ]  
 старшинѣ съле/нія лежащаго на западномъ  
 берегу въ Губѣ Анивѣ [, ] пожаловала Се/  
 ребреную мѣдаль на владимерской ле/  
 нтѣ [, ] Всякое другое приходящее судно [, ] /  
 какъ Россійское [, ] такъ и ино-стран/ное  
 приходящее [, ] просимъ ста/ршину сего  
 принимать за Росси/йскаго подданнаго [, ]  
 У сего приложе/на Герба фамиліи моея пѣчать [, ] Россійскаго Флота Лейтенантъ/  
 Хвостовъ

[1806年10月11日 [あるいは新暦] 23日, 海軍大尉フヴォストフ指揮下のロシア [海軍] フリゲート艦ユノナは, サハリン島およびその住民らが, ロシア皇帝アレクサンドル1世の至仁なる庇護下に服属する証しとして, アニワ湾西岸に存する一村落の長老にウラジーミル綬銀褒章を授けたり。[爾後] 来航する一切の船舶は, ロシア船異国船を問わず, すなわち外来者は「なんびとも」, この長老を遇するにロシア臣籍たる者として [扱われんことを] 乞う。[よって] ここにわが家の紋章たる印を捺したり。ロシア海軍大尉フヴォストフ]

泉石旧蔵写本ではその下方左端に印章の写しが存する。

7はこのロシア文の片仮名書きと訳稿と上述したが, ここには2種ほぼ同文——とはいえ小異あり——が写されている。その1 (「淤呂舍字用例考他」8オ・ウから「臆譯切意2他」2ウに続く) は縦書き, その2は横書き (「臆譯切意1」) 今後者5行を引用すれば次の通りである。(注の行取りは印刷の関係上一部変更した)。

1806	ゴダ	ヲカトヤベリヤ	$\frac{12}{24}$	ゼンヤ
千八百六年	九月	オキチヤブレハ十月」ナリ我九月ニア」タル○ 九月ハセンチャブレ也	$\frac{十二}{廿四}$	日
ロシイスコイ	善	ベレカテ	水ノ	
魯西亞国	命令	コノナ	ボタ	
		未詳	為	

## 幕末ロシア語研究の新出資料について

ナサレ ストロマイ プロタレーテ  
未詳 同上 與アタヘン

ナンダワ」 ラストロワイ ゼ  
欽 島 助語カ

セナーペロインヤテヤ ラストロワ サワリインヤ  
地名 島 黒龍江ノ落チ」ロニアル島ナリ」唐太ノカ

又 島ノ別名乎 水  
イ エキラレーヲナコ ボダ  
助語カ 名ナ欽女帝」エカテリテ 為 ホタレー者為ス」ト云フ也

地名乎 地名  
ウエスボミリヤステヘイセエ ボカロイー  
「ボミリイ」ハ平」和ノナリ  
前」後ノ詞ハ不解

テリストラ」 ロシスイカゴ インペラトロ  
三 百 魯西亞 天子又帝

尊号  
アレキサンデラ ベレカコ  
當今ノ名 命令

尊号 又  
スタロシイカエ スヘレンイヤ ナ ザハダンヨリイ  
未詳 同上 助語 未詳

ベレダク グビー アンイー」  
ガイ グビーナツトレハ」爵ニツ 不詳  
命令 グ」官ナリ郡侯」代トモ  
イフベキ」役ナリ

地名乎  
ホスカロバカヤ スエレヘロヤンアヤ  
同上 同上

又  
ナ ウエラタイ ロシイスカズ  
尊キ 魯西亞

尊号  
レンテイ ウエザコエ ベルコエ ベリホタヤシヤエ  
インテ乎」来ル ウイエザコンエ」乎 ドルゴエ乎」 ヘリホータ乎」悪クナシ  
ナ」リ 尊キ」宗旨 別又外 又悪ク」思フナ

ロシイスカゴ ナ」 ベリリヤチナ  
魯西亞 助語 ベリヤーテ」レ乎懇  
意」又親シク

又 尊号  
イノストラノエ ホロシイリー  
外国又」異邦 願 又 頼

尊  
スタラシリスエゴ ベリンミヤテ  
未詳 ベリミヤテ乎」  
交 替 乎」  
トリカエル」ベリシヤテハ」交易ノ

ザ ロシイスカゴ ボダチヤンナゴ  
助語 魯西亞 未詳

ロシイスカゴ クセゴ  
魯西亞 未詳



引用資料同紙左端には「臆譯切意」と題する一文をのせるが、この文が上掲ロシア文の大意である。次の如きである。(下線は朱筆を示す。)

臆譯切意

千八百六年文化三年九月我カノ九月也十二廿四日此方ノ日ニ非ズ」魯西亞國ノ命ヲ受テサワリンヤカラッ  
ト島坎ノ諸島ヲ」貰ヒ受ント欲ス此下云々文字不審 女帝エカテリヲナ此下云々不審」當今アレキサンテ  
ラ此下云々不審グヒキ官名ニ命シテ」此ニ来ラシム此下云々不審抑我大魯西亞國崇奉ノ宗旨」ハ至テ尊  
キ一箇ノ宗門ナリ他邦ニテ怪ミ悪ム」無ク信義ヲ結ヒ交易ヲ許シ給フ」ヲ番フイ

右者文化三寅年淤呂舎人唐太ヲ乱妨シテ其」跡ニ残シ置ル紙札三枚ノ譯文ナリ

「臆譯切意」は上記その1にも存する(「臆譯切意2他」3オ・ウ)が、すでに引用したごとく、ほぼ同意とみる。しかしながら、すでに掲げたロシア語原文の訳と比較すれば、誤りが多いことは明らかである。残念ながら、単語レベルの力では文章を臆測するしかなかった。

フヴォストフ文書1806年のもの2通のその1はロシア文であった。この文章が不通であるとのことからフランス文の書簡と、さらにロシア文書簡裏には片仮名による和文が認められたことは上述したが、この和文がすなわち上の3. 口上である。「淤呂舎字用例考他」の9オ・ウに写されているが、翻刻は他書に譲る。フランス文書簡はロシア文書簡ともどものちオランダ商館長ドゥーフのもとに解読の依頼となって示されるが、もとより原文は篤胤には存しない。しかしながら、ドゥーフともども仏文書簡は蘭通詞らにも示され、訳文を要求されたようであり、その試訳が8. 名村多吉郎訳文(「銅板正字他」3オ～5オ)である。長文ゆえ割愛するが、フランス語テキストは齋藤阿具によって引用されているので、そちらに譲りたい。要は、自己の乱妨の根拠を示すものだが、日本はロシアとの約束を守って通商を行なうべきこと、しからずんば北辺の領土が侵略されることが必然であることを表明する。松前奉行宛ロシア文書簡は残念ながら篤胤のもとには残されていない。のちゴロヴニンらがロシア文書簡の翻訳を求められるが、本文そのものの伝来は存しない。しかし、次のようなものであったらしい。(原文は旧正書法による綴りであったはずだが、今依拠する書のまま新正字法のまま引用する。ゴチックはローマン体に戻した。)<sup>(注7)</sup>

Лейтенанта Хвостова бумаги Матмайскому губернатору. Соседство России с Япониею заставило желать дружеских связей и торговли, к истинному благополучию подданных сей последней Империи, для чего и было отправлено посольство в На[н]гасаки; но отказ оному, оскорбительный для России, и распространение торговли японцев по Курильским островам и Сахалину, яко владениям Российской империи, принудили, наконец, сию державу употребить другие меры, кои покажут, что россияне могут всегда чинить вред японской торговле до тех пор, как не будут извещены через жителей Урупа или Сахалина о желании торговли с нами. Россияне, причинив ныне столь малый вред Японской империи, хотели только показать им через то, что северные страны оной всегда могут быть вредимы от них и что дальнейшее упрямство Японского правительства может совсем лишить его сих земель.

## 幕末ロシア語研究の新出資料について

[フヴォストフ大尉の松前奉行宛て書簡。ロシアと日本が近隣関係にあることは、この後者の(注・日本) 帝国臣民の真の安泰にかかわる友好関係と通商関係を望まないわけにはいかなかったため、そのために長崎へ使節を送ったのである。ところが、ロシアに対する侮辱的な拒絶とロシア帝国領同然のクリール諸島やサハリーンにおける日本人の商業拡大は、ウルップ又はサハリーンの住民等を通じて我々との通商の希望を表明してこない間は、ロシア人等はいつでも損害を与えようことを分らせるような他の諸手段をわが國がとることをついに余儀なくさせたのである。ロシア人等は、唯今のところ日本帝国にごく軽微な損害を与えているにすぎないが、北方諸国は自分の方から損害を与えようと思えばいつでもできることと、日本政府のこれ以上の頑迷はこの方面の自國領のすべてを失うはめになることの点を通じて彼らに知らせてやりたかっただけのことである。]

ドゥーフによるフランス語書簡からの蘭訳はなるべく辞句を緩和するようなされたというが、ことロシア語書簡からの訳は、誤訳だらけと評さざるをえない。そのことをよくよく明示する資料である。

さて残余の2・4・5・9の原資料についても述べる。2の花文字等だが、これは光太夫将来のロシア文字練習帳から写されたものとする。本書は今日、鷹見泉石による精写本が『魯西亜國字學』(文化10年・1813)として伝来するが、その本来の名は次のようである。

ПРОПИСЬ / Показывающая красоту / Россійскаго письма. / Изданная въ москвѣ. / 1787 Года.

[ロシア文字の美を示す習字手本帳。1787年モスクワ刊]

[[ロシア文], 1オ～3オの花文字2態は『魯西亜國字學』のXページ, IXページのそれと一致する。また4オ・3ウの大小文字も同じくVIIIページのそれと一致する。

4. ロシア国官名は源有撰『魯西亜文字集』(寛政8・1796) 35オ～33オの<魯西亜國官名大概>に一致する。しかも『文字集』にはない、ロシア文字で<イセノクニシロコダイコクヤコヲダヌフデ>の注が存することは注目に値する(淤呂舎文字2ウ)。「文字集」とのつながりはこればかりにとどまらない。「淤呂舎文字」11ウ～15ウの音綴表は、体裁を変じてはいるものの、『文字集』56オ～52ウの<変語五音>に一致する。さらに「淤呂舎文字」中のロシア文字によるイロハ、ローマ数字、ロシア文字表、等も『文字集』の当該部分に一致するとみられる。「淤呂舎文字」の多くが『文字集』に依っていると推量される。なお、しかしながら『文字集』の<変語五音>等の音綴表は、上掲の光太夫将来 Пропись のXI～XIIIページのそれと一致する。『北槎聞略』中の音綴表にせよ、他者も含めかかる音綴表は、ロシア文字表記・片仮名表記の別にかかわらず、Пропись にすべて発すると筆者は考えている。

5. 扇面の書の写しは、光太夫にさかのぼるであろう。書風が似ているが、初期のものか。9. レザノフ所伝文字表はおそらくは『環海異聞』(文化4年・1807)の<序例附言>中のロシア文字表にはほぼ一致するが、本写本は文化3年成立ゆえ、『異聞』の原資料あたりから写されたものでもあろうか。

## 5 『魯西亜語』

⑦の『魯西亜語』は重要ゆえ、別に節をもうけた。本書は上・下2冊にして大きさは19.2cm × 12.8cm 前後。上册80葉，下冊66葉。紺の表紙で製本されており，書き題簽に〈魯西亜語 上〉のようにあるが，内題には次のようにある。

淤呂舎語 平田長眼齋編集

〈淤呂舎〉の用字は①淤呂舎字用例考他，②淤呂舎文字と共通し，おそらく篤胤の選択による用字であろう。上・下冊ともに毎半葉9行の印刷された野紙に墨書される。それぞれ巻首に〈平田氏記〉の蔵書印を捺す。本書には既述のごとく，鏡胤のそえ紙にもある通り，篤胤自身の編集にかかるとみられ，かつ自筆本である。内容は魯和語彙集。

本文は片仮名によるロシア語を，はじめ頭字のみ五十音順に分類する。ついで，出典順に列挙する。出典は〈淤呂舎人聞書〉〈無名書〉〈大光傳〉の3種。第一のものは〈魯西亜人聞書〉とも表記される。上段に片仮名でロシア語を掲げ，下段に対応する日本語を配する。上册巻頭を示せば次のようである。(体裁変更)

○阿

アゴン 火

右淤呂舎人聞書

アブライリ 四月

アヲコシ 八月

1行1項を原則とするが，総項目数は1818である。五十音順に，かつ出典別に項目数を示せば次表のごとくである。(五十音表記は篤胤。)

五十音順	項目数	出典別			五十音順	項目数	出典別			五十音順	項目数	出典別		
		聞書	無名書	大光伝			聞書	無名書	大光伝			聞書	無名書	大光伝
阿	30	1	14	15	知	69	2	20	47	武	18	1	1	16
伊	44	0	11	33	都	10	1	2	7	米	10	0	1	9
宇	104	6	10	88	弓	48	0	3	45	母	33	2	6	25
延	49	1	11	37	登	74	2	17	55	夜	25	0	6	19
淤	93	1	45	47	那	26	1	5	20	由	6	2	1	3
加	44	1	14	29	爾	14	2	8	4	余	0	0	0	0
伎	23	0	3	20	奴	1	0	0	1	羅	19	0	6	13
久	30	1	5	24	泥	48	0	3	45	理	26	2	5	19
氣	15	0	2	13	能	18	2	3	13	琉	9	0	0	9
古	88	2	16	70	波	62	0	23	39	礼	27	3	5	19
佐	65	1	24	40	比	62	0	17	45	呂	8	1	2	5
斯	81	2	25	54	希	49	3	2	44	和	10	2	1	7
須	101	3	15	83	幣	77	0	22	55	韋	0	0	0	0
勢	69	4	22	43	富	151	0	32	119	惠	0	0	0	0
曾	24	0	7	17	麻	18	0	7	11	袁	0	0	0	0
彡	32	0	8	24	美	8	0	3	5	計	1818	49	433	1336

この総数1818は、『北搓聞略』言語篇の1500語，『北搓聞略』と『環海異聞』のロシア語をまとめ

## 幕末ロシア語研究の新出資料について

た長谷川延年『魯西亞方言』の1530語と比しても多く、重複が存するにせよ、注目に値する。本文中胡粉による訂正箇所が多くみられ、かつ篤胤の注も多数ある。

上記出典のうち、〈無名書〉は今のところ未詳としておく。〈淤呂舎人聞書〉は『千島白波』中のレザノフに関する記事のうちに語彙がまとめてあげられているものと一致する。よってレザノフに関する資料のひとつがもととなったであろう。〈大光傳〉のほとんどは、松平定信に呈せられた語彙集『魯西亞語類』（田辺安蔵編、寛政4年、1792）<sup>(注8)</sup>の語彙に一致する。この書は、ラクスマンのネモロ来航時にいちやく現地へ趣いた幕吏により、光太夫らから採取された語彙をまとめたものである。

篤胤は江戸にあって、幕府にかかわる学者を介して3つの資料を入手し、その和魯の順にある語彙をおのれの許で魯和の順に直し、かつ表記を変え、さりながらも出典を明示し、若干の注を加えて『魯西亞語』上下2冊を成した。本文にはもとより、片仮名書きであるためにロシア語が誤写された例も少なからず存するものの、基本資料をまとめあげた篤胤の研究ぶりは賞讃に値するであろう。

## まとめとして

文化露寇事件をきっかけとして篤胤も北方問題に意を用いた。それは文政10年の『千島白波』<sup>(注9)</sup>に結実するとみるが、実の処、本書は直接的な警鐘の書ではない。文化年間の露寇事件からフェートン号事件を中心として元文の黒船やらハンペンゴロウ事件をも含め、公私の諸々の情報をきわめて詳細に蒐集した、いわば実見者の資料集である。これらを読むことにより、世界に〈我が皇國に比ぶべき美き國ハ無〉いことを思い弁え、〈己政とる身にし有ねバ。云う無きに似たれども〉心得るべきこととして〈書集メ秘蔵〉したというのである。主として日本人側の日本語資料の集積であった。

これに対し、本稿でとり上げたロシア語資料は、光太夫将来の資料から派生したものとフヴォストフ文書関係の資料を中心とする。前者では文字と音綴が学習され、後者では翻訳の試みの過程が示されている。篤胤は後の『神字原』『神字日文伝』などの著作が示す通り、文字にはおおいに関心をもったゆえ、ロシア文字についても学習し、ロシア文字による自署も行える域に迄達した。また当時あたうる限りのロシア単語を蒐集して魯和語彙集をも編集し、おそらくはフヴォストフ文書の訳をも試みたのではなかろうか。しかしながら、これは不可能であった。光太夫が、名村が、さらに加藤肩吾や大槻らですら不読であった。片仮名書きのロシア語テキストに不備はなほだしい魯和語彙集の訳語を漢文訓読のようにふりあてても、ロシア語の文章は解しえなかったのである。しかしながら、当時の一般のロシア語学習の実状と資料の多くを示すこと、はからずも片仮名表記とはいえ当時最大限にロシア語単語が篤胤によって集められ一書とされたことはよく評価できるであろう。またロシアを知るために迂遠ともいふべき文字の学習から開始しようという篤胤の気概は、正当な学問的態度であると高く評することができる。篤胤のロシア語資料は光太夫以後、レザノフ直後、馬場佐十郎・村上貞助・ゴロヴニン以前に、わが国のロシア語学習・研究史上、位置すると結論づけるものである。

[謝辞] 本稿をなすに当たり、次の諸機関の貴重書等を閲覧しました。

国立歴史民俗博物館、天理大学附属図書館、古河歴史博物館、國學院大學図書館

また英文レジユメは Prof. M. Petersen の校閲をえました。ともに記して謝意を表します。

## 注

1. 平野満<平田篤胤の蘭馨堂入門と蘭方医学研究>「日蘭学会会誌」10巻1号、1985年10月。
2. 国立歴史民俗博物館「明治維新と平田国学」2004年9月25日；宮地正人編「平田国学の再検討（一）」国立歴史民俗博物館研究報告 122集、平成17年3月。
3. 上掲「平田国学の再検討（一）」p.112。
4. 出典は、「タチワカレ…」は百人一首中、中納言行平の和歌。「ニホンメハ…」は尾張蕃重臣・横井某の川柳というが、未詳。
5. フヴォストフ文書については次を参照せよ：高野明<フヴォストフ文書考>「早稲田大学図書館紀要」第6号、昭和39年12月。
6. 他の資料も含めて泉石の資料については次を見よ：岩井憲幸<鷹見泉石旧蔵ロシア語関係資料若干についての覚書>「泉石」第1号、古河博史博物館、1990年11月。
7. Сенченко(ор. cit.), стр. 11. による。このテキストは Файнберг(ор. cit.)にも途中まで引用する。стр. 101-102. このテキストは本来ロシアのアルヒーフによるべきであるが、今回不可能であった。古く Берх が自著に引用したもの(1826年)を郡山(ор. cit.)pp.336-337が紹介している。Сенченко と比べ、冒頭部分の有無、文字の大小等々の違いがあるが、基本的に同一テキストである。Сенченко のテキスト中私注は省く。через は чрез が正しいと考えうるがそのままとする。和訳の<フヴァストフ…書簡。>以下は郡山の直訳を引用した。
8. 天理大学附属図書館所蔵。なおこの書の同一異名本が古河歴史博物館と早稲田大学図書館に伝存する。文化4年(1807)鷹見泉石写『魯西亜言語集』および勝俣銓吉郎旧蔵『幸太夫魯西亜語覚書』(年紀未詳)である。参照：<『魯西亜語類』本文露和索引>「明治大学教養論集」通巻443号、2009年1月。
9. 國學院大學図書館所蔵本による。写本、大本10冊。函架番号Ⅲ・329・10。

## 主たる参考文献 \*注に示したものは再掲しない。

### I. 資料等

1. 亀井高孝『北槎聞略』昭和14年再版；杉本つとむ『北槎聞略 影印・解題・索引』早稲田大学出版部、1993年。
2. 亀井高孝他『魯西亜文字集』吉川弘文館、昭和42年。
3. 河合忠信編校『魯西亜語類』昭和60年。
4. 斎藤阿具譯註『ゾーフ日本回想録フィッセル参府紀行』駿南社、昭和3年。
5. 杉本つとむ他解説『環海異聞 本文と研究』八坂書房、1986年。
6. 羽太庄左衛門正養『休明光記』(北方未公開古文書集成第四巻)、叢文社、昭和53年。
7. 『通航一覽』第八、第九、國書刊行会、大正2年。

### II. 研究書等

1. 田保橋潔『増訂近代日本外國關係史』刀江書院、昭和18年。
2. 郡山良光『幕末日露關係史研究』國書刊行会、昭和55年。

## 幕末ロシア語研究の新出資料について

3. 日本ロシア文学会編『日本人とロシア語 ロシア語教育の歴史』ナウカ, 2000年。
4. 渡邊金造『平田篤胤研究』六甲書房, 昭和17年。
5. 田原嗣郎『平田篤胤』吉川弘文館, 昭和38年。新装版 平成8年。
6. Э. Я. Файнберг, Русско – японские отношения в 1697-1875 гг., М., 1960.
7. И. А. Сенченко, Исследователи Сахалина и Курил; Сборник статей, Южно – Сахалинск, 1961.

(いらい・のりゆき 文学部教授)